

BOOK REVIEW

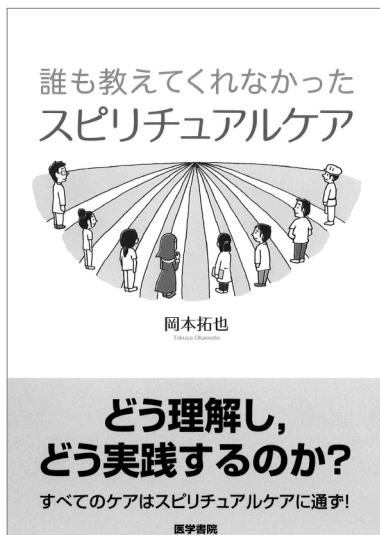
誰も教えてくれなかった

スピリチュアルケア

岡本拓也 著

本体2500円＋税

医学書院 ☎03-3817-5657



今から6年前、緩和ケア認定看護師をめぐっていたときに、授業に何度も登場したのが「トータルペイン」、さらにその一構成要素であるという「スピリチュアルペイン」という言葉だった。

基礎看護学生時代は、患者さんの痛みは「身体的」「精神的」「心理社会的」という3つの側面で捉えると教わり、そう理解していたものだから、「信仰をもつ人が少ない日本でなぜスピリチュアル?」というのが素朴な疑問だった。

幸い、翌年に認定看護師を取得でき、表面的にはスピリチュアルペインも理解したつもりだった。病院や緩和ケア病棟に比べ、在宅ではスピリチュアルペインに直面する機会が少なく、正直あいまい

でも困らないと考えていた。

スピリチュアル概念の構造がわかる

それが本書を読むことにより、考え方が明らかに変わった。ここには「トータルペイン」の図は登場せず、そもそも「スピリチュアリティ」とは何か、ということが丁寧に解説されている。とりわけ、おそらく著者の経験に基づくと思われる図「スピリチュアル概念の相互関係」が、今までスピリチュアルなセンスをもっていなかった私のガイドラインとなった。

正直なところ、一度読んだだけではよく理解できなかった。そこで2回目は「相互関係」の図の構成要素に従い、序章↓第2章（全体構造）↓第5章（スピリチュアリティ）↓第3章（スピリチュアルな経験の意味）↓第4章（スピリチュアルな経験の意味）↓第6章（スピリチュアルペイン）↓第1章（スピリチュアルケア）↓第7章（まとめ）と読んでみた。

すると、マラソンのゴールの瞬間のようににすっきりした心地よい疲労感を覚えた。このように読むことで、自分のスピリチュアリティをも認知できたのではないかと思っている。

人に接するあらゆる専門職に向けて

本書によると、そもそも人は誰でもスピリチュアリティを備え持つ存在である。人は、この世に生を受けたときから、さまざまなスピリチュアルな経験をしている。平穏な日常生活においては、それを自覚せずとも幸せに生活できるが、病気や人生の節目となる大きな出来事に遭遇すると、その経験が時にスピリチュアルペインとなり、葛藤のなかで人として成長を続ける。その経過や回復過程で他者の助けを必要とすればスピリチュアルケアの対象となるし、自己解決できることもある。

私たちのように、職業上スピリチュアルなケアを提供する者は、今後すべての領域において、この概念を学ぶことを必須要件としてもよいのではないか。対象者のスピリチュアリティを理解しケアを実践できるまでには、時間と努力を要する。また、人生経験が少ない援助者の場合、時に対象者が援助者を支援する存在になるかもしれない。

それこそがスピリチュアリティが相互関係に基づく所以であり、そのケアを生涯とする者の醍醐味である。人に接する時間に幸福を感じるあらゆる専門職に勧めたい。